主論文の要約

論文題目　　現代汉语代词主观化研究
（現代中国語における代詞の主観化）

氏名　　赵 宏刚

本研究は現代中国語における代詞の主観化（subjectivization）について考察するものである。

文或いは発話は、事態を表す領域（客観的命題）と発話者の態度（事態、命題に対する捉え方、発話の仕方）を表す領域からなり、後者の領域は「主観化」と呼ばれている。一般的に、主観化は、語が客観的な意味から主観的な意味へ変化されるとされており、その客観的な意味は発話者の命題に対する主観性（主観的態度など）に大きく左右されるものであると指摘されている。

本研究が考察対象とする中国語の代詞も文或いは発話においてしばしば発話者の主観性を表す。しかし、中国語における主観化研究はこれまで副詞、助動詞、語気詞といった範疇で限定的に取り上げられてきたものの、代詞の主観化を体系的に分析し、かつその内実について明らかにした研究は管見の限り見られない。

現代中国語における代詞は人称代詞（“我、你、他”など)、指示代詞（“这、那”など)、疑問代詞（“谁、什么”など）の三種類に分けることができる。文法機能について言えば、代詞は体詞性のもの（“我、你、他、谁、什么”など）と述詞性のもの（“这样、那样、怎么样”など）があり、一般的にこれらは代替機能を果たしている。例えば、“小李和小张是同事。”［李さんと張さんは同僚だ。］について言えば、“小李”、“小张”を人称代詞の“他们”で代替し、“他们是同事。”［彼らは同僚だ。］と言うことができる。また、“他在看汉语书。”［彼は中国語の本を読んでいる。］においては、“汉语书”を疑問代詞“什么”を用いて代替し、特定疑問文“他在看什么？”［彼は何を読んでいるの？］と表現することができる。しかし一方で、言語事実として、代詞がこのような本来の代替機能を果たさず、専ら発話者の主観性を表す事例が多く見られる。例えば“还看电视，看<u>什么</u>看！赶紧写作业！”［まだテレビ見てるの？何見てるの！さっさと宿題しなさい！］における“什么”は発話者が知りたいものや事情について聞くために用いられるものではなく、聞き手に対する〈不満〉の気持ちを表している。また、“那些无非是恐吓，<u>不管他</u>。”［それらは恐喝でしかないから、放っておけ。］における“他”は三人称代詞ではなく、虚指代詞として“不管”という否定構造と共起し、行為、事態などに対する発話者の〈無関心〉な態度を表している。

以上を踏まえて本研究では、現代中国語の代詞が文或いは発話において如何なる主観的特徴を有しているかについて、共時的側面から分析し明らかにしていく。また、同時に通時的側面

において、代詞の主観化ルートを究明した上で、代詞における主観化のメカニズムを明らかにする。また、意味論的な視点から考察を試みることで、代詞における主観化の異同が代詞本来の語義的特徴を根幹として密接に関連していることを指摘する。こうした一連の考察を通じて、より合理的、包括的な代詞の主観化体系の構築を目指す。

本研究は、現代中国語における代詞の主観化ルートやメカニズムに焦点を当てながら考察を行なうものであり、考察によって得られた結果は、代詞の主観化研究における更なる進展への踏台となり得ると考える。また、言語現象における主観化は、人間の認知的活動に深く関わっていることから、本研究の成果は言語と人間の認知的活動の関連性に関する文法研究への一つの足がかりになるとも言える。

本研究の構成を各章の要旨とともに示すと、次のようになる。

第 1 章ではまず、現代中国語における代詞の主観化及び本論に深く関わる概念（主観化、主観性）とその意味属性について考察した。また、代詞の主観化に関する代表的な研究を概観した上で、本研究の問題意識及び研究手法について説明を行った。

第 2 章では、人称代詞の“他”を構成要素とするモダリティーマーカー“不管他”の意味特徴を分析しながら、“他”の主観化ルート及びそのメカニズムを共時的、通時的な観点から考察した。

本章ではまず、“不管他”における“他”の指示機能の虚化（指示対象の曖昧化及び消失）を起因として、“不管”と“他”の間に再分析（reanalysis）が誘発されたことを指摘し、これにより、“不管他”は語彙化（semanticization）され、譲歩条件文において接続詞の文法的位置を獲得したことを論証した。こうして、“不管他”自体が〈無関心〉という意味特性を備えるため、“他”が文脈的意味吸収（absorption of context）によって、発話者の主観性を表す役割を担うようになったということを指摘した。

第 3 章は疑問代詞“谁、什么”の主観化について考察するものである。

“谁、什么”は元来の疑問用法とは別に、専ら発話者の〈不満〉や〈否定〉的な感情を表す表現も多く見られる。第 3 章ではまず、意味と統語の両側面から考察を行ない、“谁、什么”が表すこのような意味特性は反語文によるものでなく、あくまでも文脈的意味吸収に大きく影響されるものであることを論証した。

本章ではまた、語用論的な視点から〈不満〉や〈否定〉的な感情を表す“谁、什么”を用いる発話意図について考察した。その結果として、“谁、什么”を用いる表現形式には「反発」と，質問に対して適切な情報を提供しないという「回答回避」の二つの意図が含まれているため、発話者の反発的な語気を高め、自分自身の観点や立場などを固めることに有効であることを明確にした。

第 4 章では、通時的視点から“怎么样”が用いられる表現形式を取り上げ、“怎么样”の主観化の様相について考察した。

“怎么样”には疑問、反語及び婉曲用法を備えるだけでなく、発話者の「先見性」を表す用法も見られる。本章ではまず、“怎么样”の主観化ルートを考察し、また“怎么样”の各種用

法を比較対照した結果、“怎么样”の「先見性」用法は反語用法から派生したものであることを明らかにした。これは、語用論的視点から見ると、“怎么样”の否定疑問用法は一種の非疑問用法であり、発話者が自らの意見、主張などに自信を持っていることによって、相手に対する否定或いは反発的行為を行なう。“怎么样”の「先見性」用法も一種の非疑問用法であり、当該用法においてこのような「先見性」が現れるのは、発話者が自分の意見、見通しなどに対して揺るぎない自信を持っていることによるものである。この二種の用法は統語的、語用的意味機能が共通しているため、メタファーという文法化メカニズムが誘発され、“怎么样”の反語用法から「先見性」用法が派生されたことを指摘した。

第 5 章では、中国語の指示代詞“这、那”において「性状の程度」を表す用法が如何に形成されたかという問題に着目し、その文法機能及び形成されるメカニズムを共時的、通時的な観点から考察した。

まず、性状の程度を表す“这”と“那”の互換性及び“这、那”の文法的、語義的特徴を共時的に考察した結果、“这、那”の指示機能の虚化が、両者の程度用法を形成する起因となっていることを明らかにした。

また、実例調査に基づき、通時的に詳細な分析を行った結果、次のことが判明した。①“这、那”を用いた程度を表す用法は、“这/那＋NP”形式から“这/那＋VP”形式が派生した結果、形成されたものである。②“这/那＋VP”形式における“这、那”が統語的に副詞的な振る舞いをするようになり、次第に性状の程度を表す語義的機能を獲得した。更に、文脈的意味を吸収することにより、“这、那”の程度を表す用法としての地位が確立された。

第 6 章では、第 5 章で明らかにした“这、那”の虚化ルートを分析の足がかりとして、指示代詞の程度表現及び「指示義」から「程度義」への形成モードについて考察した。

本来ならば、指示機能を果たすべき指示代詞が、なぜ性状の程度を表すようになったかという問題を出発点とし、指示代詞“如此、这样、那样”を中心に、中国語における指示代詞の「指示義」から「程度義」への形成要因、即ち文法化メカニズムについて通時的視点から検証を行った。

また、中国語において、「指示義」から「程度義」への形成モードが存在することを指摘し、「性状を指す」という語義的特徴は、このような形成モードの確立に大きく関与していることを論証した。

第 7 章では、これまでの考察で明らかとなった結論を総括し、現代中国語における代詞の主観化の特徴と異同を体系化した。まず、人称代詞、疑問代詞、指示代詞の主観化は、文法化メカニズムに直接関与していることを指摘した。具体的には、人称代詞“他”と指示代詞“如此、这样、那样”の主観化は再分析によって、疑問代詞“怎么样”と指示代詞“这、那”の主観化は類推（analogy）によって、疑問代詞“谁、什么”の主観化は文脈的意味吸収によって支配されたものである。また、各種代詞の主観化過程においては、文脈的意味吸収の関与が欠かせないものであることも論及した。

主観化された代詞が存在する一方で、主観化されない代詞も存在する。本研究の考察におい

て主観化された代詞が「行為、事態」を指すのに対し、「数量」を指す疑問代詞“几、多少”や「場所」を指す指示代詞“这里、那里”は実際の発話行為において主観化されることはない。本章では、認知言語学的な視点から、「性状を指す」という語義的特徴が備わっていないことが代詞の主観化を制限する要因であると指摘した。